5/3 朝

あすを見つめて

地域おこし協力隊発足10年 ①

干し柿スイーツに着目 河内佑真さん(安芸太田)

「地域活性化」初心貫く

机いっぱいに広がる黄やオレンジ色の付せんには、「営業と連携」「経理×イノベーション」など数多くのキーワードが踊る。4月上旬のある日、南区の県立広島大大学院経営管理研究科(HBMS)の研究室。新たな事業の構想を語り合う社会人ゼミ生の中に、県職員の河内佑真さん(30)の姿があった。

「地域活性化につながる仕事がしたい」。広島大を卒業し、地銀に入行した。山口市に住む両親は、一人息子の将来に期待し、大いに喜んだ。ただ、思い描いていた理想と現実は違っていた。融資の可否ばかりを考える日々。2012年12月、1年9カ月で行員生活に見切りをつけた。

就職のあてはなかったが、「地域の役に」との初心は変わらなかった。インターネットなどで、いわゆる「元気な自治体」を検索し、実際に訪れた。そんな時、テレビで見たのが「おしい!の~ぉ。安芸太田町」のポスターだった。観光PRのため県が作ったキャッチコピー「おしい!広島県」を、他の市町に先駆けて模したセンスやスピード感にやる気を感じた。「ここなら楽しくやれそうだ」と思った。

13年2月、同町が募集していた地域おこし協力隊に応募。求められたのは「中心市街地の活性化」で、1年目は地元の人々との交流や空き家調査、移住希望者の相談などであっという間に時が過ぎた。山間地だけに、冬はしんしんと雪が降り積もる。地域の困りごとと都市の人々の楽しみを組み合わせた「雪かき体験ツアー」にも取り組んだ。

ゼミの仲間とお互いの事業構想について語り合う河内佑真さん(中央)=南区の県立広島大大学院で

協力隊最終年の3年目は、寺領地区のおばあちゃんたちが特産品の干し柿を活用して作ったスイーツ「祇園坊柿 チョコちゃん」に深く関わった。細長く切った柿の先端をホワイトチョコでコーティングしたもので、01年から地元の道の駅などで1パック50グラム入り250円で販売されていたが、おばあちゃんたちは無報酬だった。「これを何とかしたかった」

大量生産や常温販売ができるよう工程を見直し、年間3万個の製造を可能にした。洋菓子店のパティシエに協力を仰いで抹茶味を加え、国内最大級の地域産品コンテストで準グランプリを獲得。値段を倍にしたが売り上げは急増し、「おばあちゃんたちに、ほんのわずかなボーナスを渡せたのが最大の喜び」と懐かしむ。

河内さんはその後、県職員となり、中山間地域振興課に配属され、「自分のスキルをもっと磨きたい」と昨年4月、HBMSに入学した。今は別の部署で働くが、「地域おこし協力隊の3年間は、私の人生を大きく変えた。その恩返しを、これからコツコツと積み上げたい」と話す。視線の先には「地域活性化に貢献する」という、はっきりとした目標がある。

◇ ◇

総務省の地域おこし協力隊事業は、2009年度にスタートした。「ヨソモノ」「ワカモノ」の熱意と行動力が行政と地域にどのような刺激を与え、その中で若者たちは自らの能力や才能を発揮したのか。5回にわたり近況を報告する。

=つづく